國道八號線（四）

金森誠之

十七

家の壞されるのは、荒尾に助けられて、一時は免れたが、美智子の父は、相變らず床を離るゝ事が出來ず、壞されかゝつた見すぼらしい構えの家丈けに、知り合ひのトラックが、時折ガソリンを買つてくれる位で、細々と、其の日の糧をつなぐ事さへも大變であつた。

時計はもう九時を打つた、美智子は、近所の家から、着物の縫ひかへしを頼まれて、少しでも家計の助けにと、薄暗い電灯の下で針を運んでゐる。弟はその側で、算術の宿題をやつてゐる。

姉さん今夜もお詣りに行くの？

「えゝ」と輕く首肯いて、弟の方を見ながら、

「餘り遲くならない内に行つて來るから、正ちやんも、早く勉强をすませてお休みなさいね」

と縫さしの着物を片附け初めた。

僕も一所に行つてやらうか

正次はいつも姉の身を案じてこう云ふのであるが、若し留守中、父が眼をさまして、何か用事が出來たときに困る心配から、斷るのであつた。

正ちやんにお留寄頼むわ姉さん一人で大丈夫よ

そゝくさと仕事を片隅に寄せて、足早に出て行つた。

姉の下駄の音は、淋しく遠ざかつて行く、

隣室では、父の咳入る聲、

「おい水をくれないか！」

正次は急いで臺所から持つて行く、

留守にしなくつてよかつた。それにしてもあの細つた腕、頰はこけて、眼は深く落ち込んでゐる。良いお醫者に見せれば、早く治らうに、藥さへ充分に與へ得えぬ今日、正次は、漸く眠つた父の側を去つて、何くれと小さい胸を痛めるのであつた。

ガソリンでも賣れゝば——あゝそうだ。正次は何思ひついたか、臺所の方へ急いで這入つて行つた。

＊　＊　＊　＊

美智子が歸つた時、正次の姿が見えないので不審に思つてゐると、臺所の方で、何だか物を打ちつける音がしてゐる何か大工遊びでもこの夜更けにしてゐるのかと考へられたので、あゝした事の好きな弟の氣分を壞したくないと思つたが、明日の學校に差しつかえでもしたらと、靜かに障子の外から、

正ちやん何してんの、明日學校があるからいゝ加減に止めなさいよ。

と云つて、寢支度にとりかゝつた。

姉さん見ないでね、僕ガソリン賣る機械を作つてるんだから

ガソリンを賣る機械？

餘り不思議な事を云ふので、這入つて行かうとすると障子をしつかり押さえて開けさせない。

出來たら見せるから見ないでよう——

「可笑しな人ねえ、では見ないからいゝ加減に寢るんですよ」

戸締りをした美智子は床に這入つて、弟の來るのを待つて居た。

金槌で何か打ち込む音がして居たが、それが止むと、鋸で何かゴシ〳〵切り初める音がして來た。

「何してゐるんだらう？」

勿論寢つくことも出來ない。鋸の音は直ぐ止むと、ガタガタ片附ける音がして居たが、漸く電燈が消されて、床の敷いてゐる部屋に這へつて來た。

「お父さんが眼をさますのではないかと隨分心配してよ」

「すみません」

「何拵えたの？」

正次は聞えぬふりして、寢衣に着變へると早速床に這入つて、スヤ〳〵と寢息を立てゝ居たが不意に大きな聲を出して

姉さん戰爭なら、人を殺しても良いのね

と尋ねる、

「正ちやん今晩どうかしてゐるのね、そりや、かまいませんよ――それがどうしたの」

「でも普通人を殺せば死刑になるのに、戰爭で人を殺したら勳章を貰へるからさ」

「お國の爲ですもの」

ウン判つた、この間荒尾さんの云はれた樣に、良い事をする爲めには惡い事をしても良いのね

「さあさ、もう遲いから、お話は明日にして早く寢なさい」

此度はほんとうに眠つたのか、安らかな寢息は、可愛く響いて來る、美智子もいつの間にやら眠つてしまつた。

十八

勢ひこめて、走つて行つたトラックは、美智子の家の二、三間手前で、「キユーン」と、鋭い音を立てゝパンクした。

正次は走り寄つて、パンクした後輪を握つて、運轉手を見上げながら、

おぢさん、パンク直すのを手傳つてやるよ

と呼びかける、

東京を立つてから、府中、八王寺を過ぎ、大垂水の峠を越えてから、殊に道が惡く、片阻道の、幾つかの急カーヴに身心稍疲れはてた運轉手には、このパンクも、一憩ひのチヤンスとなる丈けに、餘りに不快にも感じない。

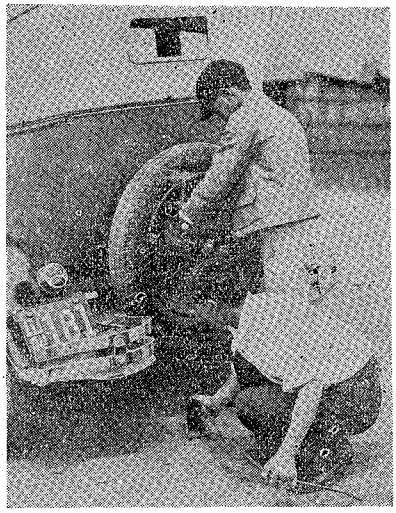
頼むよ

正次は甲斐々々しく、豫備タイヤーを外してゐる。

美智子も、家から出て來て、正次の殊勝な働きぶりをほゝ笑みながら見てゐる。

おぢさん、ガソリン買つて行かないか

運轉手は助手と顔を見合せて、首肯き合つて居たが。



ウンそうだ、五つばかり入れてくれ給へ

美智子は、ポンプを推して、五ガロンの目盛りまで來ると、ホースを持つて、ガソリンタンクへその先を推し込んだ。

「もうこれで、甲府まで大丈夫だ」

と運轉手達は、セーム皮で、手をふきながら、助手に云つて、煙草を一本取り出して火をつけた。

「ねえさん、一寸休まして貰ふよ」

「えゝどうぞ」

美智子はお茶を出して、

お通りの節は又どうぞお願ひします

と愛嬌をふり散いてゐる。

「ねゑさんの樣な奇麗な人が居るのをちつとも知らなかつた。これから、通る度にお世話になるよ」

「まあ――お上手を、ほんとうにお願ひしますわ」

運轉手が、運轉臺に乘つて、アクセルを踏むと、大きなスタートの音を立てゝ走り出した。

その自動車が、まだ姿の消えない頃、次に來た大きなトラックは又、大きな音を立てゝ同じ所でパンクした。

正次は前と同じ樣にかけ出して行つて、パンク直しを手傳ふ、そうして又ガソリンが賣れて行く。

次の自動車も又その次の自動車も同じ樣に、パンクして同じ樣にガソリンを買つて行く。

餘りの不思議に美智子は裏口へ廻つて、道路に面した生垣の側を見ると、正次がしやがんで、道路面を見つめて居るのを發見した。

正ちやん、何してゐるの？

不意に呼びかけられた姉の聲に、正次はギヨツと驚いて、ドギマギして、

僕あのう……

と丸で面食つてしまつた。手に何だか木の片を持つてゐる、美智子は弟の、あわて方に、何だか不吉なものを感ぜずには居られなかつた。

「何です。それは？」

姉さん、これ投げるとパンタしてガソリン賣れるんです

弟の差し出したのを見ると木片に釘を打ち込んで、方々に刺を出してゐる。

まあ正ちやん、何故そんな惡い事をするの？

美智子は、餘りの弟のみじめさに、泣聲になつてゐる。

正次の手から、強くそれをもぎ取つて、畠の中へ投げ捨て、怒りの眼で正次をねめつけてゐる。

でも姉さん、荒尾さんが云つたよ――良い事をする爲めに惡い事をしても良いつて

病んだ父に捧ぐべき藥にも、事缺かしてゐる今日、ガソリンが賣れゝば、藥も充分に買へよう。孝行も出來よう、と子供心に考へあぐんだ、事であらう。昨夜、何だかゴトゴト作つて居たのはこれであらう。

餘りのいぢらしさに、美智子は弟を抱きしめて、聲を立てて泣く、正次も、惡い事と知りつゝ行つて、こんなに迄姉の心を痛めるのかと、

姉さん、御免なさいね

と泣きじやくりをしながら姉の胸に顔をうづめるのであつた。

いけません、こんな卑劣な恐ろしい事をしては——

自分の涙をぬぐつたハンカチーフで、弟の涙をふいてやりながら、弟を戒まし める。

けれ共、この赤貧に、その日〳〵を追はれて行つたならば、一體どうなるだらう。殊にまだ身も心も固まらぬ幼い弟はどうなつて行くだらう。前途を考ふれば、眞暗で何の當もない心細い、心細い行く手であつた。

十九

昭和八年四月、新聞紙は「上野原を外して新國道開鑿」とデカ〳〵と書き立てゝ以來、上野原の町は擧げて文字通り通過運動に狂奔した。

沿道の町村長は連署して內務大臣に陳情した。その十二月には山梨縣會は滿場一致で可決して、議長は府縣制第四十四條に依つて大臣に「上野原町を通過する樣改修せられむことを望む」と意見書を提出した。

越えて九年三月、貴衆兩院へ請願書を提出して、衆議院は本會議に請願を可決し、貴族院は可決の後意見書を附し內閣總理大臣に送付したまでの運びとなつた。

人口僅かに六千五百を過ぎないこの田舍の町として、此處迄運ぶのは大變な仕事であつたらう。

町長倉田正太郎氏は勿論、國道八號線期成同盟會長細田賢作氏、副會長奈良明治郎氏同佐藤要氏等は殆んど、自分の家業も打ちやりにして東奔西走をしたのであつた。殊に町の元老として立てられてゐる。細田賢作氏の熱心さ陳情を受けた高官連は何れも其の眞劍さに舌を卷いたのであつた。

けれ共――。

「私モ實ハハツキリトシタ計畫ヲ今存ジテ居リマセヌガ、確カ上野原ヲ計畫トシテハ通ラナイコトニナツテ居ルカト思ヒマス。ソレハ矢張リ成ルベク現在ノ國道筋ヲ通ツテ行ク譯デゴザイマスケレドモ、其ノ爲ニ非常ニ右曲シマスト云フト改修ニ、マアアル區間ヲ五十萬圓デ以テ改修出來ルモノガ七十萬圓、八十萬圓カヽルト云フコトニナリマスト財政計畫ノ上ニ於テ困リマスノデ」云々

と貴族員に於ける。三室戸子爵の質問に對する、政府委員の答辨の速記錄を見ては、町々の人々は張り合ひも何もぬけてしまふのであつた。

月日は流れた、けれ共上野原通過に對して、少しも良い風が吹いて來なかつたのみか。

測量の結果どうしても通らないと決つた樣な噂が、殆んど確定的の樣に云ひふらされてゐる。

國道が上野原を通らなくなつたんだつてね

鋤を擔いだ百姓が顏を見合せて心配顏に話をしてゐる

瀬戸物屋の前で、主人と客とが心配顔に話をしてゐる。

宿屋の女將さんが、いら〳〵女中をしかつてゐる。

ガソリン屋の前で運轉手が、ガソリンガールから氣の毒そうに話を聞いてゐる。

「スタンドを島田村へ引つ越すさ」

運轉手は大きなあくびをして運轉臺に乘る。

下へ移つても御ひいきにね

貨物自動車が動き出す。

＊　＊　＊

役場はもう午後の十一時過ぎといふに、明々と電燈が輝いてゐる。

町の主だつた人達は、額を集めて、相談してゐる。

停車場が下にあり、これで國道が上野原を通らなかつたらば、もう滅亡だね

首座にあつた。此の町の元老と推されてゐる細

田老人は思はず嘆聲をもらす。

人々は唯顔を見合すばかりである。

二十

凄い迄に生ひ繁つた杉の並木、その内に諏訪神社の境内はすつかり夜の幕に包まれて、社殿は、ボンヤリと寧ろ無氣味に、立つてゐる。

遠くで梟の聲が淋しく聞えて來る。

美智子は一日の用事を濟ませて、毎日の神詣でに今晩も家を出たのがもう夜も大部更けて居た。漸く祈りを濟ませて、神前を去らうとすると、樹影に怪しげな男が立つてゐる。

此の夜更けに女一人、それも人里離れて、假令大きな聲を立てたとて、助けに來てくれる人は恐らくなからうと云ふ淋しい森の中である。

美智子は親の病氣の治ることゝ、道が上野原を通過することゝで、頭が一杯で、自分は若い娘であると云ふ事さへ忘れて居た。

内山さん、お迎ひ有り難う遲かつたのね！

美智子は、トツサの智惠に大きな聲で叫んだ。黑い影は驚いて、町の方へ歩いて行つた。

今はこの奇智で難をのがれたが、歸り路で、愈々人が來ないと判るとどうなるか判らない。美智子は社殿の後を廻つて、垣根を飛び越し、田畠の中を、道もない小さい畦を這ふ樣にして、國道の方へ急いで行つた。

水路を渡つて、あの繁を越せば、國道になつてゐる國道まで出れば、と心はあせるが暗さは暗し、中々渉らない殊に雜木林の中へ這入つてからは、星の光も通らず、丸で手さぐりで歩いて行くより仕方なかつた。

アッ!!

美智子は崖に足をすべらしたのであつた。

山の根まで平であるべき、豪地で美智子はこんな所に谷があらうとは思はなかつた。

深いと云つても三米に足りない谷であつたから、命には別條がなかつたが、腕や足の所々を痛めて、そこから國道まで這ひ出るには、中々大變であつた。

木の枝や、草の根を握んで、漸く谷を這ひ上り、雜木林の中を、僅かに百米にも足りない距りであるが、一時間餘りも掛つたらう。國道が星明りに白く見えた時は、美智子が氣が弛んで殆んで、轉り落ちる樣に道端へ倒れた。

今日は三七、二十一日の滿願の日である。賴るべき唯一の神賴みとして、全く絶望らしい國道の上野原通過を娘心に、夜毎〳〵に願つたのであつたが、この災難に、全く望が絶えて起き上つて、歩くことさへ出來なかつた。

迷信だわ、神樣なんて當にならないわ

熱い涙が、兩の頰を傳つて流れてゐる。自分の家の將來を考へて見ると、深い〳〵谷底へ落ちて行く樣な心細さ、それに荒尾さんがあゝして、助けてくれたとは云へ、あの方にいつ迄も御世話になつて居る譯には行かない。けれ共借金をお返しする當と云つたら全く見込みがないのだから、

アツ痛ツ!!

美智子は立ち上らうとしたが、どうじても立ち上り得ない。今迄氣が張つて居たのだが落ちついて見ると足頸をくぢいたらしい。

美智子が途方にくれて、これで歸る事が出來なかつたらどうしよう。と足首の痛いのを忍んでもんで居た時であつた。町の方から風體の惡い遊び人風の男が、浪花節を歌ひながら降りて來た。

星明りに淸若さうな娘が、着物も亂れて、坐つて居るのを見掛けたので、急ぎ足で近づいて來た。

顏はさだかではないが、暗にもくつきりと浮き立つた美貌に、男はニタ〳〵と笑ひながら、

ねえさん、どうかしたのかね?

と聲をかける。

美智子はハツとして、思はず居ずまいを直し、見上げると、印絆天のくしや〳〵になつたのを着た下品な男で、酒氣を帶びてゐるらしい。思はず足の痛さも忘れて、立ち上りキツとなつて、處女の神々しさに近づけまいと構えた。

「こんな淋しい所で男でも、待つてゐるのかい？　よせやい、それよりわしと一所に行かう」

近づいて、美智子の腕を取らうとした。

何するんです、失禮な！

美智子は怒つて、男の手を拂ふ

「怒るなよ――さあわしと……」

危險が近づいたのを見ると、美智子は町の方さして、逃げ出した。

然し足を痛めてゐる上に、女の足の到底男に及ぶべくもなかつた。男はいきなり、美智子を後から羽がえ締めにして、抱きすくめた。

アレ――誰か來て――！

絹を破く樣な悲鳴が、夜更けの諏訪山に響き渡つたが、もう十時を過ぎた上野原の町はすつかり眠つてゐる。而も町までは相當の距りがあるのだから、誰一人この聲を聞きつける者もなからう。聲は谷から山へ傳つて、かすかに消えて行く。

男はのしかゝつて來た。熱い酒息で、みだらな息が、美智子の唇に近づいて來る。

聲を立てゝもだめだと知ると、男の腕に嚙みついた。痛さに男は手を離したので、再び駈け出す。

アツ！　くぢいた足が妙に曲つたと感じた時、美智子は道端に横倒しに倒れた。恐ろしい獸は、今こそと襲ひかゝつて來た。

嚙みつく、引つかく、あらゆる抵抗を試みて、二つの體は道端に轉り廻つたが、美智子の首に卷かれた男の強い腕は、だん〳〵氣が遠くなつて行く樣な氣持ちになつて行くのを覺えた。

父の病のために捨てれば、捨てゝ充分の手當をなし得らるべきを、守り通した。この大切な體を、こんな獸に、と遠くならうとする氣を、これではならぬと、再び猛然と狂ひ初めた。然し野獸の如き男と、痛んだか弱い女との爭、唯晴れ渡つた空に、星はキラ〳〵ときらめいて、流れて一つ扇山の方に消えた。

この時である。大曲りの急勾配の邊りであらう。セコンドギアーに、クラッチを入れた。物すごい、エンヂンの響が、夜の靜寂を破つて美智子の耳に響いて來た。そうして、その響が近いたと見ると、怪物の眼の樣な烱々と輝いたヘッドライトは、この男女をマザ〳〵照し出した。

*　*　*　*　*